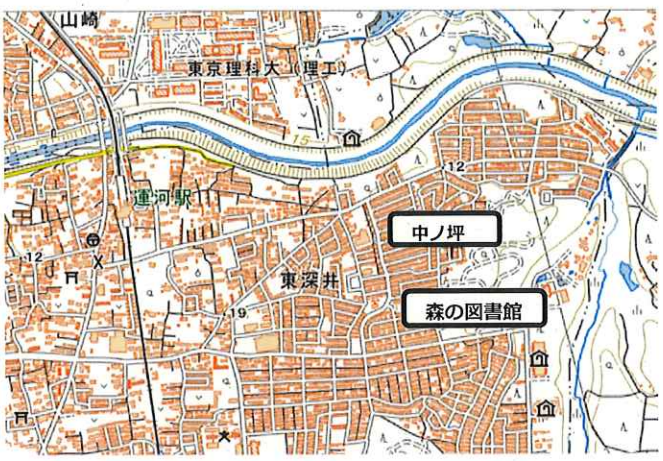
郷土かわらばん

1300年前に鉄をつくっていた村
東深井中ノ坪第Ⅰ・Ⅱ遺跡

①遺跡の場所

森の図書館近くには、1300年前、鉄をつくっていた村（中ノ坪第Ⅰ・Ⅱ遺跡）がありました。現在は、宅地になり、当時の面影はありませんが、いったいどのような村だったのでしょうか？



国土地理院地図　（中ノ坪第Ⅰ・Ⅱ遺跡と森の図書館周辺）
https://maps.gsi.go.jp/#16/35.914670/139.917251/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1　参照日2022-9-29

②中ノ坪遺跡の概要

遺跡は発掘調査が行われ、工人が暮らした第Ⅰ遺跡と鉄を作っていた第Ⅱ遺跡が発見されています。第Ⅰ遺跡の調査では、住居跡が10軒見つかり、住居内からは多量の鉄滓（てっさい）（鉄クズ）が出土しました。

第Ⅱ遺跡は、第Ⅰ遺跡とは谷津をはさんだ場所にあり、その南斜面からは製錬炉が発見されました。

出土した遺物や精錬炉の形から、奈良時代のはじめ、8世紀第1四半期頃の遺跡です。

③鉄づくり

古代の鉄づくりとはどのようなものだったのでしょうか？

古代の製鉄炉の多くは、斜面を利用してつくられていました。中ノ坪遺跡の精錬炉は、下図の様に半地下式の構造です。

精錬炉とは、鉄鉱石や砂鉄の原料から鉄と不純物を分離し、鉄資材を得るための装置です。

鉄づくりの工程

この製錬炉でどのように鉄が作られたのでしょうか。

炉の上部から、燃料の木炭と原料の砂鉄を交互に投入し溶解させます。

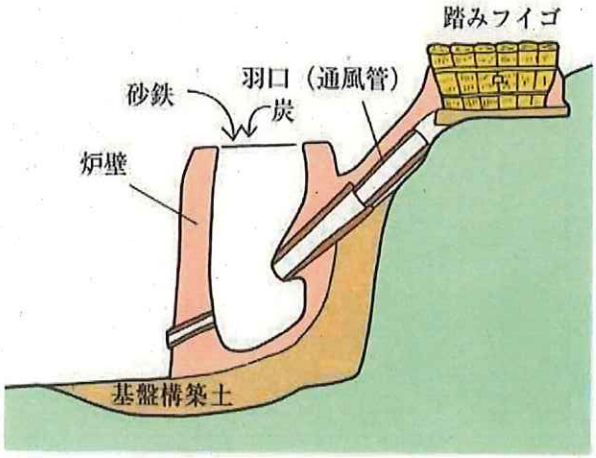


図　竪型炉の構造

「県史　「千葉県の歴史」資料編　考古３（奈良・平安時代）」

古代の房総三国　1古代のムラ　6鉄と鉄器をつくる　P.18　22.竪型炉の構造

森の図書館twitter
@N_morinoto

発行
流山市立
森の図書館
指定管理者
株式会社
すばる

炉の上部にあるフイゴという道具を使って風を送ることにより、炉内の温度は１３００度以上の高温になります。これにより砂鉄から鉄と不純物が分離します。

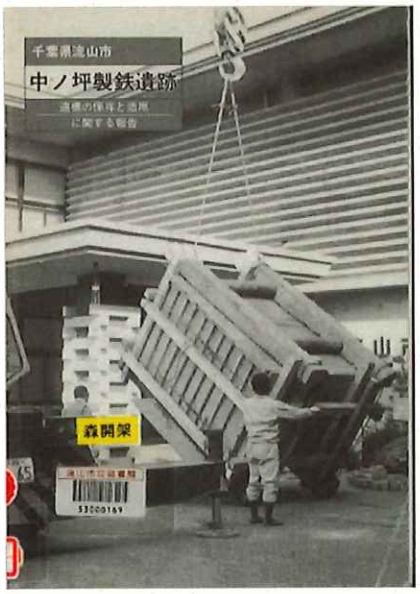
そして、炉を壊して不純物（鉄滓（てっさい））を炉外に流し、炉内に残った鉄塊を取り出しました。不純物が冷えて固まったものが「鉄滓（てっさい）」、操業の成果品である鉄の塊が「鉄塊（てっかい）」と呼ばれます。

④なぜ、ここで鉄づくりか

流山周辺には、同じような製鉄遺跡がいくつも発見されています。では、なぜ鉄をつくる村があったのでしょうか？

ひとつは、政治的な背景が考えられています。律令国家の東北経営（蝦夷への支配）への補給の役割としての拠点（茨城・千葉北部に多い）であったと考えられています。その最前線は、相馬市周辺→茨城→石岡→東葛地区と繋がっていきます。

もうひとつは、利根川の小支谷（小さな支流の谷）では砂鉄（原料）が手に入りやすかったのも要因と考えられます。



「千葉県流山市中ノ坪製鉄遺跡」表紙

切り取られた製鉄炉は博物館に搬入されました

※流山周辺で製鉄遺跡があったところ

地名に金山　金クソなどの小字が残っています。

流山市内では、こうのす台、野々下に金クソの小字名が残っています。

富士見台第Ⅱ遺跡

柏市花前第Ⅱ、宮後原製鉄遺跡・松原製鉄遺跡

⑤おまけ

スタジオジブリ作品の「もののけ姫」の中では、たたら場のシーンがあります。映画から古代～中世の頃の鉄をつくる村の様子がよくわかります。中ノ坪の村もこれに近いイメージで鉄がつくられていたのです。『映画のたたら場では、山が舞台となっています。炉の火力を維持するために必要な原材料は木炭で、山の木と川の近くでは砂鉄が採れるという理由です。鉄をつくるには、山（森・林）と川は重要なのです。』

⑥展示された製鉄炉

製鉄炉は１９８１年に取り上げ保存処理され、切り取られたものは現在博物館で展示しています。

写真 27　中ノ坪製鉄炉

「ふるさと流山のあゆみ」P.57

参考文献

・『たたら製鉄の遺跡歴史』文化ライブラリー４８４　角田徳幸　吉川光文館
・『千葉字講座』０５０７１３　神野　信
・『房総半島における古代製鉄遺跡』　神野信
・『千葉県の歴史』資料編　考古３（奈良・平安時代）
・『千葉県流山市中ノ坪製鉄遺跡』　流山市教育委員会　１９８４年
・『東国の古代』崙書房　１９７４年
・『ふるさと流山のあゆみ』　流山市立博物館　流山市教育委員会　２０１８年
・『東葛飾の歴史地理』１９９４年　崙書房
・『シリーズふるさと探訪　中ノ坪第Ⅰ・Ⅱ遺跡』流山市郷土資料館１

協力：流山市立博物館